

# 公益財団法人 中村元東方研究所 東方学院

## 東方だより 第二十三号

【本部(東京本校)】  
〒101-0021  
東京都千代田区外神田2-17-2  
延寿お茶の水ビル 4階  
TEL 03-3251-4081  
FAX 03-3251-4082  
URL <http://www.toho.or.jp>

### 理事長ご挨拶

### 「東方学院歌の寄贈と記念事業の進捗」

前田専學



中村元先生ご夫妻は、先生が亡くなられる二年ほど前に、東京の多磨墓地に建てられた墓碑に「慈しみ」というブツグのこぼれを刻されました。これは、先生が邦訳された原始仏典『スッタ・ニパータ』の一節で、それをご夫人が筆で書かれたものです。この墓碑は一九九五年の先生の誕生日に決意され、一九九七年のご夫人の誕生日に完成したと仄聞しています。

この「慈しみ」のこぼれは、先生が東西の万卷の書を読み、思索されて、最後に到達された究極の結論です。これはご生前中ご夫妻が実践されたことであり、そして私たちのみならず、生きとし生けるものに向けての先生ご夫妻のこころからのメッセージではないかと思えます。当研究所並びに東方学院の『手引き』やホームページの冒頭に、このこぼれを掲載し、私たちの指針としております。

このこぼれをしばしば眺め、考えている中に、いつしかこの詞に曲をつければ東方学院の学院歌になるのではないかと思うようになり、先生のご息女三木純子理事に、若い作曲家にお願いできないでしょうか、とご相談いたしました。昨年のある日、三木理事から、東方学院歌「慈しみ」ができたので、寄贈したいとお申し出がありました。そこで早速、昨年の十月十日、インド大使館で、中村元東方学院賞授賞式に先立って、この学院歌のお披露を行いました。

作曲は、国立音楽大学作曲科を首席で卒業と同時に有馬賞を受賞され、同大学院を首席で修了と同時に作曲部門最優秀賞を受賞され、国際的にも目覚ましく活躍されている、三木理事旧知の中村匡宏氏であります。奇しくも中村先生と同名の中村匡宏氏は作曲家であるばかりではなく、ソニー所属のオペラユニット「レジェンド」のピアノリストとしても活躍されています。

インド大使館で中村氏のピアノ伴奏で学院歌を見事に歌って下さったのは小堀勇介氏です。やはり国立音楽大学音楽学部声楽科をご卒業と同時に谷田部賞を受

本号目次	
理事長ご挨拶	1 頁
東方学院歌	2 頁
行事報告(学術賞・哲学カフェ)	3 頁
行事報告(二十五年度下半期) / 中村元記念館案内	4 頁
リレーエッセイ	5 頁
当研究所からのお知らせ	6 頁

賞され、同大学院の音楽研究部専修オペラコースを終了され、それと同時に声楽部門最優秀賞を受賞されるなど、お二方とも本当に音楽の才に恵まれた前途有望な方々です。

先生のご生地松江に創立された中村元記念館に、昨年の四月十三日、待望の東方学院松江校が開校され、今年四月十二日に新入研究会員のガイダンスが予定されています。これからは東京のみならず松江でも、ガイダンスなど折ある毎に研究員や事務局員の方々のみならず、広く研究会員の方々などにも歌って頂き、皆さんの愛唱歌となり、慈しみのこころが、私達の、そして広く全人類のこころとなればと願っております。

一昨年から始まった中村元生誕一〇〇年の記念行事は、恙なく成功裡に進捗しており、来る七月十九日(土)と二十日(日)に開催される比較思想学会の学術大会を残すのみとなりました。

比較思想学会は、一九七四(昭和四十九)年に、インド学・仏教学の世界的権威であり、日本における比較思想の開拓者でもあった中村元先生を中心として成立し、現在、約七〇〇名の会員を擁する全国学会です。現会長は、本研究所以から巣立たれ、本東方学院の講師であり、かつ本研究所以の評議員でもある末本文美士国際日本文化研究センター教授であります。

本学会の学術大会は、中村先生が会長であられた当時、高松や、隠岐で開催されたこともあり、今回ご自身の生地である、しかも中村元記念館で開催されることをご喜びになるのではないかと考えております。このような夢のようなことが実現できますことは、偏に皆様方の力強いご支援と終始変わらぬ温かいご協力の賜であり、心から厚く御礼申し上げる次第であります。

平成二十六年(二〇一四)年四月一日

\* 東方学院歌の歌詞と楽譜は2頁に掲載しました。

# 慈しみ

東方学院歌

詞 中村 元  
作曲 中村匡宏

## 慈しみ

一切の生きとし生けるものは、

幸福であれ、安穩であれ、安樂であれ。

一切の生きとし生けるものは、幸せであれ。

何びとも他人を欺いてはならない。

たとどこにあつても

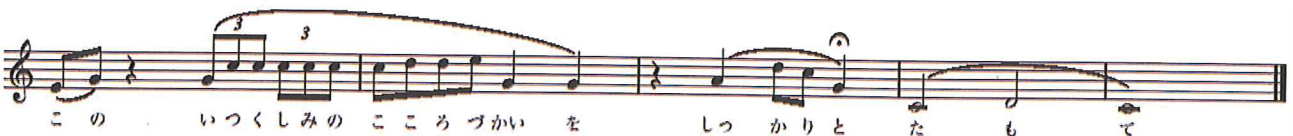
他人を軽んじてはならない。

互いに他人に苦痛を与える

ことを望んではならない。

この慈しみの心づかいは

しっかりとたもて。



© 2013 Kunihiko NAKAMURA.

平成二十五年下半期 行事報告

第二十三回 中村元東方学術賞授賞式



右：受賞の喜びを語る丸井浩博士  
中：学院歌の作曲者中村匡宏氏(左)、詠唱者小堀勇介氏(右)  
左：選考経過を述べる前田専學理事長

当研究所の創立者である中村元博士が顕著な功績のある研究者を顕彰することを目的として設立した中村元東方学術賞の第二十三回授賞式が、平成二十五年十月十日(木)、東京都千代田区のインド大使館において執り行われた。

受賞式に先立って、学院歌「慈しみ」(詞・中村元、作曲・中村匡宏)が華やかに披露され、当研究所の奈良康明常務理事により三婦依文が唱和され、中村博士の命日に黙祷を捧げた。

今回の受賞者は、東京大学大学院教授であり当研究所事務局長の丸井浩博士が選ばれた。受賞理由は、インド論理学派のニヤーヤ学派、ヴァイシェーシカ学派などの分野において新知見を世界に発信してきたことが評価された。祝辞として、駐日インド大使のデーパ・ゴブラン・ワドワ氏や名古屋大学教授の和田壽弘氏が祝辞を述べた。

式の終了後、引き続きインド大使館において、丸井博士を囲みながらインド料理による盛大な祝賀会が催された。NHK学園講師の黒川文字氏の乾杯の後、中村元記念館東洋思想文化研究所副理事長の谷口博則氏や当研究所監事の浅井泰範氏が丸井博士の受賞を祝った。

第十回 中村元インド哲学カフェ

平成二十六年一月十二日(日)に、大谷大学において第十回中村元インド哲学カフェ「ヨーガの世界(生/命)」が開催されました。

前半は、細野邦子専任研究員が、「インド四住期(人生の過ごし方)」と題する発表において、四住期に関する分かり易い解説を行いました。「マヌ法典」によれば、バラモン(司祭)、クシャトリア(王侯・武士)、ヴァイシャ(商人)、シュードラ(隷民)の四つの階級の中、ヴェーダ聖典を学ぶことのできるドヴィジャ(再生族・シュードラを除く三つの階級)には、師のもとでヴェーダ聖典を学び修行をする学生期、妻を娶り子孫を増やし家長となって祭儀を行う家住期、家長の役割を終えた後、妻を息子に託するなり伴うなりして荒地や森に赴き、根や果実を食して祭儀を行う林住期、同伴者をもたず、一日一度の乞食を行いながら瞑想修行を実践する遊行期が説かれています。また、近現代では、詩聖タゴールが『人間の宗教』(The Religion of Man, 1931)において、人生の四段階について自らの考えを述べています。会場からは、「林住期で住処として言及される「森/森林」(アーランヤ)はどのような場所から」という質問がなされましたが、それに対して「修行の森は人里から近からず遠からずの場所ではないか」(茨田通俊専任研究員)等の返答がありました。

後半は、中島小乃美先生(佛教大学保健医療技術学部看護学科学科教授)が、「仏教における生(密教経典を中心)」という発表を行いました。冒頭では、生死の現場に直接に関わる看護師としての臨床経験を踏まえ、生きることの意義について問い続けてきた経緯が語られました。

次に、密教経典に関しては、今生の目的として、一切智を獲得し、慈悲としての利他行の実践を行うことが『大日経』に述べられていること等が解説されました。また、チベット仏教における六道輪廻やチベット医学に関して、それらを図示した実物のタンカ(軸装絵画)を用いて解説がなされました。最後に、中島先生は、単に病気を治すことだけでなく、病気を治癒し健康になることの意味を問う必要があると指摘されました。これは、患者を単に客観的な治療対象として見るのではなく、精神・心ころを具えた存在として捉えるという「温かな視点」ではないかと思われました。会場からも活発な質問が相次ぎ、盛会の中にカフェを終えることができました。



タンカの解説をする中島小乃美先生(左)

# 行事報告

・平成二十五年十一月十日(日) 十四時〜十六時  
**中村元博士生誕一〇〇年記念特別座談会**  
 「ブツダの旅―瞑想と造形の台地」  
 三木純子先生(当研究所理事)  
 「父と私」  
 丸山勇先生(写真家)  
 「ブツダの旅」

(於: 東大寺総合文化センター)



写真の解説をする丸山勇先生(右)



閉会の挨拶をする薬師寺の松久保秀胤長老(右)

・平成二十五年十一月三十日(土) 十三時〜十六時  
**第十四回東方学院・酬仏恩講合同講演会**  
 鈴木一馨専任研究員  
 「中国の禅宗寺院にみられる中国的理念」  
 「寺院空間と風水」  
 加藤栄司専任研究員  
 「義浄三蔵のこと」

(於: 薬師寺まほろば会館)

・平成二十六年一月二十七日(月)〜二月六日(木)  
**東方学院体験講座「インド文化入門」**  
 茨田通俊専任研究員  
 「古代インドの歴史と文化」  
 茨田通俊・佐藤宏宗専任研究員  
 「インド哲学思想」  
 佐藤宏宗専任研究員  
 「インド人のものの考え方」  
 細野邦子専任研究員  
 「東の思想と西の思想―比較思想序論―」  
 山口周子専任研究員  
 「説話のシルクロード」  
 「インド仏教説話から今昔物語まで」  
 佐久間留理子専任研究員  
 「ヨーガと芸術文化」

(於: 茨木別院)

・平成二十六年二月二十四日(月) 十七時〜二十一時  
**二十五年年度新春研究発表会**  
 釈悟震専任研究員  
 「異なる宗教間の共生を求めて」  
 「仏教国スリランカを中心として」  
 宮治昭先生(名古屋大学名誉教授)  
 「アジアにおける半跏思惟像の展開」  
 「美術から見た菩薩信仰の側面」

(於: 東京ガーデンパレス)

・平成二十六年三月十一日(火) 十四時〜十六時  
**第二回中村元仏教文化カフェ**  
 佐久間留理子・佐藤宏宗・服部育郎専任研究員  
 「『般若心経』のこころ」

(於: 東別院会館)



## 中村元記念館

設立: 2012年10月10日

博士生誕100年に合わせ、  
命日の10月10日に開館

場所: 松江市八束支所 2階

〒690-1493

島根県松江市八束町波入2060

3万冊に及ぶ蔵書や研究資料などが展示  
 故郷・松江を中村元研究の拠点に  
 東洋思想・文化の新たな発信地



# リレーエッセイ「智慧の大地」

茨田通俊（東方学院 関西校講師・専任研究員）



インド学を学ぶ以上、実際にインドの地を訪ね、その文化に直接触れることが望ましいのは言うまでもない。一九八四年の暮れに仏跡巡拝旅行で訪れて以来、インドには計四回足を踏み入れている。しかし、最後にかの地を訪れたのは一九九七年のプネーでの短期留学なので、もう十七年もの間ご無沙汰していることになる。

悠久の大地インドなどといったのは一昔前の話で、今やインド社会は加速度的な変化の波に晒されている。世界が瞠目するほどインドの経済発展はめざましく、地方ではずっと仏陀の時代と変わらない生活をしているときれていたのが、わずか二十年程でまさに劇的な発展を遂げることとなった。私が学んだプネーなどは道路の拡張整備が進んで、街の様子が一変してしまったと聞いている。

ごく一握りの富裕層と圧倒的多数の貧困層から成るとされてきた人口構成も、近年は中産階級の層が厚くなり、余暇を楽しむほどのゆとりのある人たちが増えた。当地の経済が豊かになった分、日本人がかつてのようなバックパッカーとしての安価な旅行を楽しむことは、難しくなってしまった。

また、ゼロを生んだ国の数学力は半端ではないようで、発展著しいコンピュータ関係の仕事は、国民の人気の的である。一方で我々が専門とする古典インドの研究は、現地でも顧みられなくなり、インド人でさえ難解極まりないサンスクリット語などは、学生からも敬遠されているようだ。生活の糧を得るために、少しでも経済的に有利な職が用意されている学問に、人気が集まるのは仕方がないのだろう。ただ、自国の文化に対する誇りが失われることがあれば、本当の意味での国の発展は期待できないのではないかと勝手に心配してしまう。



交通量の多いメインストリート

こうしたインドの現在の様相に、高度経済成長期の日本の姿がだぶって見える。経済発展が幸福につながると信じて止まずに突き進みながら、その後の低成長時代を経て、何が幸せなのかが見えずに彷徨している極東の国の現実、今のインドの人たちの目には映っていないのかも知れない。

日本人がかつてインドに抱いた憧れは、かの地に生まれ、我が国にも多大な影響を及ぼした、仏教をはじめとする豊かな思想文化への崇敬と同時に、近代日本が経済発展の代償として失ったものに対する郷愁に基づいていたのではないだろうか。

もちろん貧困や差別の現実を無視して、部外者の目でロマンや感傷に耽ることは許されない。物質的に発達を遂げていない前近代社会を、無責任に讚美するつもりもない。

経済的豊かさはやはり人間が求めてしかるべきものであり、そのための努力を惜しむには及ばないだろう。しかし、インドの街に共通してあった独特の臭気や、素足の子どもたちの大きな瞳の輝きは、人間が生きていくという存在の原点を、雄弁に語っていたのではないだろうか。インドとは、生の意味を豊かに教えてくれる智慧の大地でもあるのだ。



繁華街の賑わい

## 会 員 参 加 へ の お 願 い

中村元東方研究所・東方学院の活動にご賛同くださる皆様へ

公益財団法人中村元東方研究所は、東洋思想・文化に関する研究調査を行い、あわせてこの分野の研究を助成し、若手研究者を育成することを目指しています。さらに当研究所は、東方学院を、東京のみならず、中部・関西・松江にその分校を開設し、各地域における教育・啓蒙活動等を通じて、研究成果の広範な普及を図り、創立者中村元の理想を実現するために活動し、公益に資する非営利の公益財団法人であります。

その運営はご理解ご協力いただける皆様からのご寄附により成り立っています。したがって当研究所では、皆様方からの善意のご寄付を、多少にかかわらず、常時お受けいたしております。

上記のご寄付の他に、当研究所では、皆様のご便宜を考えて、次の2種類の会員制度を設け、活動の趣旨にご賛同いただける皆さまの積極的なご支援をお願いしております。

### ◇ 維持会員と賛助会員 ◇

恒常的に格別のご賛同をいただける皆さまには、維持会員もしくは賛助会員へのご入会をお勧めいたしております。できる限り複数口でのご入会をお願い申し上げます。

維持会費（年会費） 1口：5万円

賛助会費（年会費） 1口：1万円

すでにご存じのことと思いますが、当研究所は、2012年に内閣府より公益財団法人の認可を受けました。このため、当研究所へのご寄附および維持会費・賛助会費は、税法上の優遇措置の対象となります。例えば、ご寄附が2千円を超える場合には、その越えた金額が税法上の所得控除の対象となります。

なお、上記の二会員の他に、とくに当研究所が発行している年刊の『東方』をご希望の方には、以下の制度もございます。

### ◇ 普通会员 ◇

普通会员（年会費） 7千円

普通会员の皆様には、維持会員と賛助会員の場合と同様に、『東方』の他、各種行事、会合等のご案内をお送りいたしますが、この会員の会費は免税措置の対象とはなりません。なお、申し添えますが、いずれの会員も、お申し出くだされば、いつでも退会いただけます。

\* 詳細は公益財団法人中村元東方研究所事務局までお問い合わせください。

## ホームページのご案内 ( <http://www.toho.or.jp> )

- ・ 当研究所の目的・理念・歩み
- ・ 中村元博士の略歴・業績・著作文献目録
- ・ 東方学院（開講科目、講師紹介、著書紹介）
- ・ 当研究所（研究成果、研究員紹介、著書紹介）
- ・ 公開講座、イベントのお知らせ
- ・ リレーエッセイ
- ・ チャットの広場
- ・ パブリックリレーションズ 等



様々な情報が随時公開されていますので、是非ともご覧ください。

東方だより 第二十三号（平成二十六年四月一日）  
 編集・発行 公益財団法人中村元東方研究所  
 【事務局】〒101-0002  
 千代田区外神田二丁目十七番一延寿お茶の水ビル四階  
 TEL 03-3125-1140 八